

平成14年度第1回7月10日

演題：サッカーワールドカップに見るスポーツ文化と民主主義の成熟度

演者：出原 泰明（体育科学部）

(1) スポーツは日本人にとっては輸入文化である。江戸期や明治期の経済発展がもたらした余暇や様々な土着的な文化活動の蓄積がこの文化を受容する受け皿や土台であったが、残念ながら、これらの土台が近代スポーツの創出にはつながらなかった。日本はこの文化の輸入国なのである。当然のことながら欧米のスポーツ先進国に対して、遅れて受容することになる。その意味で、スポーツの文化としての成熟度には差があるといえよう。この文化的成熟度の差をサッカーに例をとって眺めてみよう。

サッカーはイギリスで生まれ、発展してきたが、その歴史は古い。1863年にはFA（Football Association）が創設され、1888年にはすでに12チームでプロリーグが発足している。1894年には二部リーグ、また1890年にアイルランドで、その1年後にはスコットランドでそれぞれプロリーグが立ち上がった。1863年の日本はまだ明治ではなく江戸時代である。

日本では明治初期から中期に当たるが当時のFA杯決勝戦の観客動員数を眺めて見よう。

1871年： 2,000人

1888年： 18,000人

1893年： 45,000人

1901年： 110,000人

すでに11万人を収容する巨大スタジアムが出現し、熱狂の嵐を作り出していた。

ヨーロッパや南米でも1880年あたりから次々とプロリーグが誕生していく。日本のプロ「Jリーグ」の誕生は1993年、ほぼ100年あとのことだ。

日韓共催のワールドカップで日本人は初めて本格的にサッカーを味わったが、初めてとも言ってよい我々の熱狂をイギリスやヨーロッパ諸国はこのようにすでに100年前から体験している。

ヨーロッパのプロクラブの成り立ちを見ると地域と生活に根ざした活動がしっかり展開されてきたことがよくわかる。教会や労働組合を母体にするもの、パブをルーツにするものなど多様だった。近代市民はこの組織を自ら作り、盛り立ててきた。祖父の時代、父の時代からこのクラブのサポーターなのであり、自分たちの組織なのである。地域と市民生活に根ざしたスポーツ活動がこうして長い歴史を持って定着しているのだといえよう。

(2) このような100年の差をさらに別の角度から眺めてみよう。

1760年代に繊維工業部門から始まったイギリスの産業革命はその発展過程の中で資本主義の矛盾を露呈し、激化させた。1867年、K・マルクスはこの発展過程の100年を総括して『資本論』の第一巻を著し、改革展望を示した。18世紀半ばから19世紀半ばのイギリスのこの100年を、日本は19世紀半ばから20世紀半ばにかけて100年の遅れをもって経験する。資本による「隠蔽された陰湿な殺人」(エンゲルス)といわれた公害を、日本は彼らに100年遅れてたどることになる。

また環境保護運動のナショナルトラストは1895年に創設されるが、日本の環境問題への取り組みはやはりまたほぼ100年遅れの今、焦眉の課題と自覚されている。

資本主義の発展度のこの差は労働と余暇の考え方や文化の成熟度に見事に反映する。ワークシェアリングの「日本の理解」はヨーロッパの資本主義の成熟の中で生まれた本来の性格から大きく外れている。こうして眺めてみると、労働、余暇、文化の理解と成熟度には100年の差があり、市民、国民のスポーツ生活にこれが確かに映し出されていると思われる。

(3) 近代スポーツは資本主義社会の文化であり、近代市民社会の文化である。近代スポーツが「競争」(competition)を不可欠のものとして含み持つのはそのためであるが、同時に近代市民社会が発展させた民主主義も同時に内容する。

イギリスにおける議会制度の発達が近代スポーツ創造の原動力になったことはN.エリアスなどの仕事で明らかにされている。暴力(戦争)で「大将の首を取る」という政権交代から、議会によって、議論と投票による民主主義的な政権交代を可能にした。こうして民主主義の制度と思想の発展が近代スポーツ創出の土台となった。「たたかい」や「争い」を文化の世界のものに作り変えたのがフィクションの世界の約束事としてのルールである。

スポーツのルールには条文化されない精神が横たわっている。それはFair(公正)やJustice(正義)の思想である。これらは資本主義の自由競争の矛盾を補完・改良する思想である。むき出しの「儲け競争」を制限し、資本主義が持つ根本的な制度矛盾を「弱者救

済]や「社会福祉」で補おうとする考え方の土台になっている。

やや旧聞となるが、ベルギーは昨年3月に原発の全廃を決定した。国内発電量の57%を原発に依存する同国だが、2025年までに国内のすべての原発を廃止するという。ヨーロッパでは「脱原発」の動きが盛んだがこの動向には資本主義の持つ基本原理の改良や補完の自覚が示されている。資本主義の基本原理は利潤追求と効率優先であるが、その成熟度の高いヨーロッパ諸国はこの原理よりも「儲け主義のコントロール」を優先するのである。「剥き出しの儲け競争」をコントロールし、弱者救済、環境保護などを重視している。

最近の報道によればヨーロッパの市民の中で「金」よりも「生きがい」を求めるボランティア運動が起動し始めているが、これらは明らかに従来とは異なった価値観が成熟しつつあることを示しているといえよう。

そしてこのような成熟の土台は資本主義と近代市民社会の発展の中で生まれたFair（公正）やJustice（正義）の思想にある。「蹴落としあい」や「自由競争」の社会ではあるが、公正と正義の思想と方法によって補完しようとした。また、公正と正義の思想は次の新しい社会を生み出し、支える「観」の土台にもなる積極性を持つものである。

近代スポーツはいうまでもなく、資本主義社会が創造した文化であり、この社会制度の基本原理である自由競争の精神で裏打ちされ、「競い合い」を文化の本質的な特徴として持っている。同時に、この文化は対等、平等、正義、公正などの精神性を持つ。

(4) 近代スポーツの輸入国、日本はこのような精神性を表現したルールや競技形式を実用主義的に取り入れた。そのために背後にある、また土台となっている対等、平等、正義、公正などの思想を充分には理解してこなかったのである。

日本のスポーツの成熟度はスポーツ先進国に比べて100年遅れていると考えるのは、とりわけ、このような民主主義的思想の定着度の差によるものであろう。また同時に今回のワールドカップで見た「大韓民国」の大合唱は1964年東京オリンピックの女子バレーボールチームへの全国民的熱狂をすぐにオーバーラップさせてくれたが、日韓のスポーツと民主主義の成熟度に

は同様に25~30年の差があると思わざるを得ないであろう。

黄色の「フェアプレー旗」の入場から始まるサッカーはフェアプレーを強調する。野球になじんできた日本人にはまだ十分にはこの思想を理解していない。

私は体育科教育学やスポーツ教育学を専門にしている。これらの教育の今日的課題は「スポーツ文化の変革主体の形成」であると考えている。この視点で今回のワールドカップを見たとき、文化としてのサッカーの特質とこの文化が持っている公正や正義や民主主義の思想を子どもたちに教えることがいっそうクローズアップすべきであることを実感した。